



沈氏七部集

後猿蓑

四

5
4406
4



門へ 5
號 4406
巻 4



蕉集巻之上

芭蕉



いれらるゝては 梅の枝を

まのうゝに 白菊のちり

糸のよろほのちのこに 花の

心をよほして 晩の梅の

まのうゝに 梅のちり

物言のちり 梅のちり

沾圃

馬寛

里圃

祐

蕉

蕉集

昭和九年
九月二日
時末

禪寺に一月あそぶ砂の上
 柳の角乃とてぬる宛
 侯の牛に傍をいそぐや
 ちれぬ娘もあうすや
 月待よ傍をいそぐや
 離の菊をいそぐや
 せれてきてぬるも
 伴傍もいそぐや

蕉 沓 里 覓 沓 蕉 覓 里

削りてちりぬのみの
 おぬいりぬのみの
 引立ててぬるも
 そ何と火入よおぬる
 花をいそぐや
 流わららのちるか

里 覓 沓 蕉 覓 里

讀

馬寛

雀カラの字や拵めて梅もあひ

てらさおの岸のおもいさ月

さやぬを四つてさくらを秋まで

好くしつちさのさく月酒

はなもあいらばなをさくら

花もあいらの流是

沓圃

里圃

寛

沓

里

悔もきりぬのしあのかさむらひ
 泣けぬまゝんてまゝらあひささ
 あすのこゝろはあまのちかき
 ぬめりまゝら 国方乃客
 何事もなきてあつたぬり
 風よこめすあつたぬり
 春新 秋のほろあつたぬり
 花のほろあつたぬり

佐 寛 里 泣 寛 里 泣 寛

何とらる伊勢の幸洲のあつたぬり
 世をききぬらあつたぬり
 徳来し志ありてあつたぬり
 春静なるあつたぬり
 雪のほろあつたぬり
 志あつたぬり
 春のほろあつたぬり
 春のほろあつたぬり

佐 寛 里 泣 寛 里 泣 寛

五
 五

汁のきつよんやうきか子のちぎて
あつちまをさつ川刈てあ
にに寺の指圖をちぎ
屋のおき乃あをき満
隣うりてあつちまのぬ小高
早下してなよよの軒
肌入て秋にかりりさの月
顔よちちちくちまのちぎ

里 佐 寛 里 佐 寛 里 佐

けい盛を寶の母おと向て
あつちまのちぎ
車のきつよんやうきか子のちぎ
守て氣味よとちぎ
るのちぎよんやうきか子のちぎ
あつちまのちぎ

里 佐 寛 里 佐 寛

新思彼の誓り此等極りて
 泣くく此等を楓わぬく
 廻の籠みぬまうけなる
 月利て空をよるまうけり
 杖節を駿河の飛柳種とり
 よここしこのをさしぬりの乾
 草のまよふとちの地ちまう
 伊弱氣つゝぬ綿とりぬぬ
 佐 寛 里 佐 寛 里 佐 寛

うき旅を懸とつれ立はりぬ
 きのぬきぬぬぬぬぬぬ
 某舟の元の申さつはつとて
 柳の傍へ行をささくぬり
 百姓のちりてせらるるも
 こゝろをを膳ふのあゝぬ某
 麦おのほねはぬぬぬぬ
 此のぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 佐 寛 里 佐 寛 里 佐 寛

上
 下

破やぶきつらぬの藤ふじの中なかの絡か線せんの
 子こを人ひとのひびきをき 泣な
 火ひ燧たいの火ひつけて傍かた手て出でて
 一ひとふゆ〜 唯ただ乃のみ米こめ
 折おしき空そら月の起おこるまは
 仰おほれ加か減げん乃のみちのおをさ
 月つきあふ〜 一ひとふゆ〜
 おひのあふにあをを縮ちぢめて
 里さと佐さ莞かん 里さと佐さ莞かん 里さと佐さ莞かん 里さと佐さ莞かん

舞まい娘むすめをやめて娘むすめのささ
 々々々々のさささからしてはささ
 花はなのおと躑つとむ躑つとむのさささねは
 寺てらのひけらららのまは
 冬ふゆよりあふ〜 一ひとふゆ〜
 一ひとふゆ〜 あ〜 風かぜ
 里さと佐さ莞かん 里さと佐さ莞かん 里さと佐さ莞かん 里さと佐さ莞かん

猿蓑にぬれたるお物の松蔭に
身をうつりしれと静かなる窓
水かき池の伸りたるありて
い徳にまはれば家をきく
鷄々あつらふやうな月
つらき孔をせんを思ふ秋

佐圃

芭蕉

支考

惟然

蕉

考

十一

十

大せ川なほく二なるあきさきの程
雪くさるし 申のころを
まらねの葉掛を皆あか
團のせきををくひの地
酒より七有のやらふ月にて
赤鷄ををくひに 西面
うらぬねのころにねを川を
平橋汗のとほらるとおろこの
考 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉

もひををくひにねを川を
大こつうひの團よやう申ら
来摺もらあきよしとてゆきや
しめて糸の中を押あか
けあきり油ををたのけも
鴨の油のまこめけあき
考 然 蕉 考 蕉 然 考 蕉

今宵賦

野盤子
支考

今宵の六月十六日の夕々々あまのあけひ月
あまの乳山よあけて衣帯の袖あめぬ
をぬくまをれを夕宵の阿そひそ〜先り
尊卑の席を〜や志〜敵て
〜〜人〜こ〜の海〜あ〜て野盤子
ひらぬおのき〜あ〜り〜人〜
〜〜人〜き〜と〜先〜と〜あ〜〜

ろろろろき人の歌よろろひておち入夜露
争て月もかゝめおちをやすして露なる
比を阿婆もたふさかしのまゝとらへり
されしそ支をさふ路のさよは作ら
ぶて時をの比をさくかたもあめのはり
きくは湖のあまのちうてまゝくわさ
わられては川くげあまひもおちしうて
のと青き夏のくく照るにいたし
ら後今宵の真の宴何そ何くく
かん

ろろろの解て解めろろのあゝを露魚の露
よめまのまゝとたふさかれあひぬ

芭蕉

まのあやあてはり
露をくくくくく蓮の根先
露のくくくくくのあまのちうて
たふさく華露よふ故お
自然のちもちうあまのち
あやあてはりまゝあまのち

芭蕉

猪を枿場の卯へ追みか
 山くくふれ多きちてあは
 飯櫃ちる面桶よそとあは打薄
 膏てユアをさくろ 照澤
 おれうま舟お積ろく枿の事
 持仰のうぢよ夕日さ
 平岡よ葉を厨き
 新風くくろ川の石風呂

翠
 高
 然
 考
 翠
 蕉
 考
 然

馬りて旅ひぬる月の影
 尾張てつきしものあなち
 歸好のこも一孔をぬりて
 西月よのく襟もあこさく
 暮ら風の善徳のほのくは
 霧く村くぬけろくさ
 喰くぬ音も響もくさいて
 何その時をら依よぢろ

蕉
 考
 然
 考
 蕉
 考
 翠

世はほろを枝の甘さなるをさしむる
 蔵こいつら種月郎く末蕉
 お前中へ端先よと川又木の町
 隣の口およの雪り氣を
 吾ららと身置とぬ酒のうはな
 是かえのふまよとあつら
 封付——又茶事とら月の暮
 そろし——あつらと盆の上宿元

蕉 考
 然 考
 然 考
 然 考
 然 考

虫籠つら四糸の尾の何糸所 然
 う腹をあらう表 一固 考
 今のはらよ鏡をえらと松檜の上 考
 大なる待りのこんみせ中ら 然
 蓋ちるる花のの籠おちをて 考
 藤うけつ——と松檜の下 高

續猿蓑集卷之下



春之部

花梅

虎泣

温ふのあつ〜あつや〜

寝付ふに〜

朝ふぬち〜

ち〜通物あ〜

角〜

具角

芭蕉

洞木

あま

花散て竹ささ軒のやすき花

酒堂

多貴なる酒名よあまのて又君
く血まも酔のまのまのれも思ひ
い〜は〜は

酒名よ更へのきまを富の花

惟然

賭みして降あまねりけり

支考

人のまもかく霞〜を所様

治徳

くもるや思中一のたの水面

猿雖

七川よりたるともあまの女中の

陽和

くもる新おのち〜を所様

乙州

咲花をさ〜〜きなる老木の

木菰

こゝろやあま〜を所様

作荷

二の解や〜を調の臺

子珊

義実のち〜を様〜

卓袋

田家

か碧のちおや〜を様

木子星

溪ゆ〜を飯ま〜

桃着

ふじのさくらさくらしー木のつら

一桐

あつれ木の根やあつれ木の腐

如雪

花をさききりぬる人な流

其角

さくらにさくらさくらさくら

一鶴少年

ぬりまた雪の志あらや軒の花

卓袋

一月を花えのあつれや

法圃

八重桜さくらさくらさくら

全

養菜

濡極や竹林さくらさくら

岩室

さくらさくらさくらさくら

曲の春

夕波の舟よさくらさくら

孤屋

一かぬの牡丹さくらさくら

尾頭

梅附柳

さくらさくらさくらさくら

芭蕉

さくらさくらさくらさくら

野水

守梅のあまひ業やりり即老賣 其角
 里坊も確まゝやかゝるの他 昌房
 投入や梅のわきまを後のわき 良品
 二病僧のなまぬ梅のさかるとい 曾え
 あゝ〜記のあまひ業やりり梅を 万半
 為るや梅の陰さして下駄の縁 魚目
 まゝ〜梅のあまひ業やりり梅を 千川
 霞所や梅のあまひ業やりり梅を 大冊

天竺のや〜梅の陰

梅のあまひ業やりり梅の陰さゝん 遊糸
 了れ〜此勝のなりやせり柳 千羽
 時〜さゝぬようらなり川やなま 意え
 ちう道を教へら〜や右柳 ^{石東}李由
 青梅のあまひ業やりり梅の陰さゝん 九之丸
 端まうけてる梅のあまひ業やりり梅の陰 巴天

鳥 附魚

其角 ^{十ヶケレ} 其塵 ^ノ 其車
 史邦 其風 ^ノ 其塵 ^ノ 其車
 智月 其風 ^ノ 其塵 ^ノ 其車
 芭蕉 其風 ^ノ 其塵 ^ノ 其車
 去来 其風 ^ノ 其塵 ^ノ 其車
 西堂 其風 ^ノ 其塵 ^ノ 其車
 傘下 其風 ^ノ 其塵 ^ノ 其車
 長白 其風 ^ノ 其塵 ^ノ 其車

野臺 其風 ^ノ 其塵 ^ノ 其車
 峯巖 其風 ^ノ 其塵 ^ノ 其車
 槐市 其風 ^ノ 其塵 ^ノ 其車
 河瓢 其風 ^ノ 其塵 ^ノ 其車
 釣糸 其風 ^ノ 其塵 ^ノ 其車
 土井 其風 ^ノ 其塵 ^ノ 其車
 圃水 其風 ^ノ 其塵 ^ノ 其車

きんぎょのしめいものあけ

子珊

かきつばたのきんぎょ

山蜂

海川よあつち

きんぎょのきんぎょ

其角

まろく

おもしろくてきんぎょ

正秀

きんぎょのきんぎょ

け筋

きんぎょのきんぎょ

羽紅

川流や流まやうらあ

猿錐

雪のふりやうらあ

園指

味ひや梅のうらあ

車来

歌とて咲きかしのも

荒雀

堤ありとらひさる

馬亮

疏あつた土埋の切

拙俵

ぬきあつた形よ

乃龍

早蕨やまらうらあ

正秀

くさねのあつた

夕可

目の影よ猫の爪は櫻屋の
浦の英やまゝのまゝくつゝ
一桐

猫魚 附胡蝶

まゝのや月よなひ啼猫の
うよゑよくめてや猫の盗喰
支考
おもしろく孔屋もあけらぬ猫小
已百

かきおりにて七翅を動かく如く
柳梅

衣よゑのくまやまき鏡の
蝶の舞おつら様よこゝは
風吹よ舞のやまゝろ小蝶
雪窓
雪窓

春鹿

振おしりや唐紙の角
沢雄

五音耕

州福のちんあてまゝく
木花

苗れや三途とよ北看月お
千川乃回きかつはかり遊歩人
川

桃 附椿

白桃や志川くも落尽ぬの色
金柝をさこ蓋なり桃のさだ
依んりやき葉枝の上の露のむ
梅はくく申をさるるに桃のさ
花ささるる桃や奇舞妓の腸躍
其角

仁東の事由ら祖父の懐のほろり
わのし経文懸のち川白く一休院の
光のささるる事

小服綿より光をやと路玉はほろ
梅を枯やしるる花咲梅のさ
取あけてるるや梅のちるるの
ちるる梅のさるるもろるに孫てるる
野坡

歎冬 附踏踏藤

山吹や垣より二十より叢一重
園枿

田家乃人又對て

山吹もあろろ糸糸解ちまは

西堂

垢おろはにけり此株や蟻のよき

雲芝

家晴や梅まよわぬあの花

荊口

まき月

山の端まろろ一尺かりまき月

魯町

まき月附春雷蛙

およのい草のたよりやまきのる

荊口

ゆき調子合はまよまきのあめ

乃龍

まき月や唐丸あろろまき月

遊刀

まき月かきし馬の武にの
旅をまき月かきし馬の武にの

まき月や松の山ろろまき月

支考

まき月やまき月ろろまき月

桃育

まき月やまき月ろろまき月

風麦

まき月やまき月ろろまき月

風騷

汐子

乃ちあり枕の清涼もなれぬ夜平け

去来

ふ川よ富士の影をよきおひの

園坊

雑春

出ちつらもあそびれ袖もき加帳

許六

ささきのやまこき新なる桐乃苗

風臨

思ふこのねのころもやわらけ縁

土芳

うけうめや春の藤の掛ちあけ

厩力

わさね花ちあはれのころや源治の家

万平

あそび毎に移居や思ひもや市井中

玄蘇

木の葉もくさねあそびあはれけ

均水

まきの日やさ葉の木の申れあはれ

正秀

とくらの舞もあはれあそびあはれ

仙化

りもあはれ申れあはれあそびあはれ

支信

三月書

藤のあそび白濁賣れ名残る

支考

業目

武仙

武仙

百歳

百歳

尚白

尚白

圃商

圃商

山峰

山峰

此のつなを業を顛倒す

千川

千川

芭蕉

芭蕉

其角

其角

山崎

山崎

去来

去来

土芳

土芳

風睡

風睡

孫を

猿錐

猿錐

子舟のちよ川西原やまきりくよ

葛原

背さくくおのおまきんまきや花の

町

業の業のまよたんじ包尾の綱の

耕野

秘の書いのまきまきまきくお目か

た板

く川まきやまき若後の白比丘元

前川

枇杷のまきのりくま怪やぬあ

科嶺

世の業や聲きあれともさる

山峰

濡いろや大あきけのぬ目乾

任行

えりやまきまきくろやよ橋のみき

竹戸

我や白さくくに鏡すえめり

是乐

搦葉や餅まきまきれり花志

沾圃

画ちのり花目よぬくり花き

圃角

まゝ部

部

其角

曉の雲をほらあや

は。よ。の。う。み。の。う。み。の。う。み。

た子

ま。の。う。み。の。う。み。の。う。み。

あ

角

蜀 嚙 嚙 ぬ お 志 所

支考

鳴 鹿 の 名 も 鹿 鳴 あり ち ち

如雪

鹿 の 名 ち ち ち ち ち ち ち ち

其

淀よりのおもひよきけし子規

けりたる山の林麓まで

順れりて 通りたると

神さかきみの木林や中やとり

木附草花

橙や月みくろのれとる ちのちあま

里しの次がうりぬちのあまら

園中 二句

浴圃

園指

野茨

け中の右本をい川に柿のた

け筋

手切のを木も柿のたきふ外

千川

飛百合や上りりさあは殊のふ

孝龍

豊山や家え百合

あゝかきかきかきかきかきかき

支考

ふもんののれてきかきかきかき

尾頭

冷けをさくさくさくさくさく

沽圃

舟のしらぬをゆふらぬ 杜若

イカ 宇多都

まゝおやせかしのつらきまゝ

拙作

まゝおやせかしのつらきまゝ

昼もや月もあつたもつた

近園

夕紅や酔てゑちた雲の尻

芭蕉

夕紅や酔てゑちた雲の尻

嵐蘭

藤のたまたまらゝあつた入江の

妙香

菫の花に酔てゑちた水の浮り外

けし

蓮のまぢやゝあつた水離れ

白雪

客あつて一草の蓮の種おとん

良品

瓜

朝露よのちかて涼し瓜の玉

芭蕉

姫梅もや神よ入ても常々

至曉

瓜

藤おちたら藤もあつたぬ牡丹汁

風流

瓜

系入やとる羽の風柱の響り申

と詩 知七

早し女も強んてやんまのるめ

園指

ゆとら男の柱おくれさるる角の

魚目

回柱奇まてやら形よの風ひ也

重り

一回はくりかうりてやぬのる

少枝

里の子ら懸揺ら子角くね

支考

雲

段を火の燭をくちくちを

許六

之月に見まの雲を照り

野菰

涼

涼しや竹揺りり萩はらむ

甲錢

可葉花や唐葉にらふ夕涼

唯然

涼りのるる

もまの葉や風やふくらむ涼

史邦

涼しや如も花まての強もら

七奇 石翠

るぬーや裏門明て夕涼と

七奇 牡丹

涼—さし半北尾振て川の甲

万幸

漫真 三句

腰かけて申に涼—ま階子外

西堂

涼—さや縁より足まぬ

支考

生碑もゆりましくわしく涼うな

雪芝

まきまき

女房屋のまきまき

涼風もあま—と寝のこりれに

游刀

いそか—髪申まぬけさ涼う能

全

立寄りく人よまきれてすまき

去来

黙然よこあさ涼うやるのと

正秀

歎人の帷子こまき夕まき

上芳

涼—さや—まき羽織の風まき

我眉

本涼やまきひのまき月

里圃

盛る

かこまきや照りかまき座の隅

野菰

木子盛るこまきのまきの暑外

万幸

夏 賢者の言を先やとて
よき言を信ずる

さあよのやうな清くて涼冷の夏

正秀

取替の内のあつさや梅はくひ

乙舟

蝶とらち目盛つて一玉新

怒風 尾張

茨ゆの垣も志あつぬ暑う船

素焼

糸のすや暑者を月におあつた

我峯

あつふりや海をうたふはあつた

下谷

積あけて暑といふやあつた

卓球

粘りやう船もよおのあつさう船
まあこれさうしうとらやの暑
舟のよ

里東

沼圃

菊に怒りさう岸のあつさ
さう作や烟の川ら庫裏の窓

可誠

曲翠

五月雨附々

さうはらや琴がよあ乃烟
さうはらやさうさうの徴の

不王 お羽

芭蕉

後下

あまのや 霞のさかぬ 女 磯にさか

治園

夕さよふと 一人さきり 白傘

拙後

白るや 蓮の葉おとせ 池の

苔蘇

夕くらや ちりしり けさる 竹の皮

曉鳥

ゆふさくら 傘めらさ ぬやま 所

圃水

蝉

白るや 申さたりて 蝉のあそ

正秀

さくらと けして 蝉て きたり けさる ぬ

胡故

森の 蝉 涼し ぶあそ ば けさる ぬ

乙州

蝉 啼や ぬの 撒さ 雲の さらけ ぬ

境鳥

けの 月や 潮さ ちりさ けさる ぬ

兼以

雑言

さくらも 涼して 木の 動や せ 團く ぬ
雲の 霞ふ なる 葉や ちり けさる ぬ
え 獲も けさる ぬの 申の ちり けさる ぬ

秋風

荆口

知真

後下

左

川待よ

あり焼や麦あ〜〜〜魚て極籠

文鳥

異つ早にあうら〜や園の公系糺

鳶

夕園をち〜るもあ〜や酒を

水鷗

魚あ〜る幸もあれは〜らハ

馬見

梅サ〜る荒か〜ぬ〜日の面

子母

澤得や送付うゆるるのあ〜

野童

端中はのりあ〜の〜あ〜

水鷗

吾の別は

さ〜形よ〜る棟のた〜や

芭蕉

粘ころを惟子あ〜るあ〜る

惟然

貪徳の〜〜〜あ〜の〜あ〜
あ〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

惟子乃あ〜るあ〜るあ〜る

支考

あひの月をいふはあひの月をいふは
 あひの月をいふはあひの月をいふは
 あひの月をいふはあひの月をいふは
 あひの月をいふはあひの月をいふは
 あひの月をいふはあひの月をいふは
 あひの月をいふはあひの月をいふは
 あひの月をいふはあひの月をいふは
 あひの月をいふはあひの月をいふは

穉う部

あひ月

あひ月に桂麻のお芳也 田のあひ月

あひ月の花をいふて穉う部

あひ月の花をいふて穉う部
 あひ月の花をいふて穉う部
 あひ月の花をいふて穉う部
 あひ月の花をいふて穉う部
 あひ月の花をいふて穉う部
 あひ月の花をいふて穉う部
 あひ月の花をいふて穉う部
 あひ月の花をいふて穉う部

くまと園位ありーのめりりせせれ
舞臺を二方様をあらわのれて平田
渺しと思ふらるるを若杜々唯を
ののこらうさくころもつちんちん
へーろれはの棉をけきさるる
舞臺のーてふたをやうりり今
このふ所の一舞の候ありん月
くくせせせせささささささ
やうらららららららららら
ハッたよはははははははははは
星のふいふーDancehall

き前の寂寞をあらわし後を風急を
あらわし五つは河何う是非を
あらわしをあらわし後の人
をあらわしー

支考評

名月の海より冷き回葉り船 酒堂
明月や花よあはれを鶴のつぎ 如行
ものしほん根やせん月足り 秀彦

漢下

ぬらぬらあつたひかりの月

智月

名月やもろの陰を人の影

厨指

名月やよ斜より死やうらな客

深草

明くや一宿の影もなし

石玉

中切り刺おの影のほく月

配力

名月やまのくくくくく

花柳

名月やまのくくくくく

圃水

れくくくくくくくくく

山峰

明月や霞ぬまよき山志多快

風国

名月や四六人集り一掃留糸

需笑

老の夕をとも宵の月も内てせ

童女

明月にわくまじり思ひ哀れり

泥芥

心路のうらみありてわらひの

片をあらひまららば

二つんやうて片地も川ぬら月見外

支考

艾子屑と煙まてりけり月見外

空牙

柿のくみれ又朧とたよ月見外

知真

舟のりもはるかに
 名月や里のむらじのまきも
 場に居て月見やうも
 明もやあつたか
 明も何ものなるか
 舟入り夜更のまきも
 舟のりもはるかに
 舟のりもはるかに

宇比
 木枝
 利合
 丹楓
 野萩
 正秀
 交季

待宵の月見舟も
 家よと老女とらふ
 お監り物しては
 姨捨を

景桃
 景桃
 景桃

園のちちやりの
 露あまて月入あま
 月見舟のまきも
 月見舟のまきも

依圃
 馬鹿
 里東
 牧童

原川の末ふたねとよの所よ
おをさうして

川ささるの川きゆや月のな
芭蕉

十六あきり所うに園のゆか
全

さうよひに園のゆもやうのた
猿雖

題詩七夕

うかゆの園のゆのあゆの何
惟然

早合まへんまへて終る朝うす
涼家

船船のゆきうにゆあゆの
東潮

うかゆのゆきうにゆあゆの
依園

ゆゆの薫姫の園ゆら
乙州

立秋

葉ぬるゆきうにゆあゆの
香川

ゆゆのゆきうにゆあゆの
元次

編りよ

新露のた透るゆら桔梗の
極梅

ゆゆのた透るゆら桔梗の
位友

子らきたわひぬ馬骨の筆ひ
 湯子
 まさちか一羽の杖あかぬ
 馬草
 一筋をうたふらふらり
 鳥栗
 弓園とら比たぬやあまうほ
 文浪
 贈芭蕉
 百合をうと莫答をゆる余ら
 風麦
 けの娘のちやうともはし
 史邦
 枯のちやうあまうとわう
 万平

鶴のやうの鳥の時やあ
 芭蕉
 鶴の家のまきあつぬ目ねひ
 至曉
 折しや雨戸にまきほ秋の
 雪
 苔をまよふに動く秋の風
 荷
 山人のこころをまきぬ鳥う
 加賀
 風をよきくくふらり
 杉下
 新秋のまきあまうとわう
 田上尼

あつちの遠くへてきつた板を

扇指

ふしつたあつちのふしつた湯の舟

風姿

朝空にまをるれー入や笠帽子

其角

さちちー此傍に経る舟

可南

竈馬や那よあつちのあつちの棚

小枝

火の傍で飼ふまをるれー出のあつち

正秀

あつちのあつちのあつちのあつち

水鷄

このまや那よあつちのあつち

杜若

鶴の何の味ある羊の先

探丸

鶴の腹をまをるれーあつちの

葛葉

蓮のまをるれーあつちの

示峯

あつちのあつちのあつちのあつち

尖子

あつちのあつちのあつちのあつち

馬寛

鶴のあつちのあつちのあつちのあつち

氷固

あつちのあつちのあつちのあつち

支考

あつちのあつちのあつちのあつち

芭蕉

穉風

秋の勢や二書にまじりて時
 雀子乃の聲もさかす秋の風
 何やらさかすかさかす秋の風
 秋の風もさかす秋の風
 さかすさかすさかすさかす
 さかすさかすさかすさかす
 さかすさかすさかすさかす
 さかすさかすさかすさかす

遊刀
 式之
 支考
 風園
 圃燕
 ぬき
 猿鯉

穉妻

独りて守りしは穉の殿
 穉妻やさかすさかすさかす
 さかすのや穉つはさかすさかす
 さかすのや穉のさかすさかす
 木實 附 甫
 園のさかすさかすさかす
 炭焼は法拂たのさかすさかす

一東
 宇比
 土セカ
 芭蕉
 為有
 玄虎

秋の月あつらふ掃のり

酒堂

はぬしやうきをもく極み

きりぎり

もく草やほのほら一し盤

作圃

伊勢の山申よ海渡の
家名を記して

和草也如のらふ山の形

惟然

~~和草也如のらふ山の形~~

まの草もきぬまのまのまの

芝草

楓

後生の塚よとれり村のま

小鯉

麻

あすかにおのの麻やゆのる

風眩

麻やふよ麻やふ守りよ

一敵

農業

起しはくを逐りりまの

車廂

木の下に佳やらの種をうね

買山

さぬしはらものあつら

知雪

心算の4後よ
うらまをわけて

芭蕉 芭蕉の草
 乃龍 乃龍の草
 斗從 斗從の草
 支考 支考の草
 全 全の草
 惟然 惟然の草
 本之 本之の草
 沾圃 沾圃の草

大御所の御書に
 ありては

菊

葛草 葛草の草
 溜子 溜子の草
 支考 支考の草
 野合屏 野合屏の草
 正峯 正峯の草
 小峯 小峯の草
 暮秋 暮秋の草

...

...

唐江也背負ふて海を秋の暮
り舟を鼓らうの糸の恨る船
れあまのしほをぬらけらるる葉の
芭蕉 乙州 野水

雜稿

又六十海をほのめして殺いせつ
る葉わらわぬ舟の舟の舟
あゝ海鳥の跡をのちうつおほきうらな
はる秋や忘れぬ時ある秋のふ
睡止 團友 之道 には

身ぬらひに霞のさちちと 鞠外 夕依子
ららあや掃るぬさぬの葉あゝ 万幸

柿の葉を焼くと葉をん尾箸 葉門 宗波

しるく馬の窓に骸骨やもて
の笛鼓ありまゝて焼くも
やまを盡て録るの煙く
くまがりあゝしんせらあり
くありぬらやとらにあり
よほらんやかの骨髄を
やゝてぬらやとらあり

Penstemon sp. O. parisiensis
P.

Penstemon

穂 穂の穂 穂の穂

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

あゝ部

時 雨 附 霜

とれはの垣の残月もさみしめ	野坡
志くぬきも又お風の馬さうら	小枝
りかゝる人もさあれお時雨	芭蕉
一時あまのつとめさるく日影の	露沾
ゆーらぬや橋の草花者あが滅	馬寛

平押よみ返回らうけあふ

野明

柴賣やうくまのまのまの

園指

梳賣もやまのまのまの

宮牙

元熊のあてまのまのまの

み有

うらまのまのまのまの

鶏口

ふのまて唐野まぬまのまの

野萩

柿包山日あもたまのまの

霞川

まのまのまのまのまの

里圃

はやまのまのまのまのまの

沖西の能目らりあはあふ

佐圃

まのまのまのまのまの

水鯢

まのまのまのまのまの

支考

え禄幸用らぬま

九月まのまのまのまの

まのまのまのまのまの
まのまのまのまのまの
まのまのまのまのまの

ち〜〜村のなほと〜〜岸から〜
めら〜〜川を展重物の〜めは
た〜〜〜めあ〜〜海を〜め
〜〜海〜〜〜〜〜

芭蕉

葉のよもや〜海も切〜〜後の産

柚の色や起あ〜〜葉の香

其角

葉の氣味ぬ〜境や萩の中

柳隣

八尋の〜海や何〜〜葉の香

沼圃

何處の〜〜〜〜葉の枝

曾江

葉窟の音も圓知を〜〜

馬寛

葉葉の隠土可〜〜の〜

色何〜〜葉も輪のち〜〜

〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜

うらやまぬ夢や作ぬ夢のな

車中書

草

あはれや疎嫌わぬ月の透り

曲翠

たゞは清く咲やまふわらの水色花

氷固

あはれのたのしみは花萩節き

唯然

花景 越南のちりきり

山家集の題より

一葉もこぼれぬ葉の氷く南

芭蕉

山菜花をえり開くゆり花

車廂

みづ梅のちよ山梅も山や鳥の

土せ方

あふ葉もたもたや雪は花様

露草

木下子 州冬枯

あまひりー木のまふらうお花の

依徳

目生さして江の甜きくさるる

露沾

冬川や木のまふらうさるる

唯然

三十一

三十一

積風より足さうりりあつたあのをきか

積風

たか松崎字比の

さうりり先かてさうりりあつたあのをきか

一道

枯もていさふさうりりあつたあのをきか

杉風

牛のり送る枯のりあつたあのをきか

柳醉

冬枯れさうりりあつたあのをきか

乃龍

草枯れさうりりあつたあのをきか

利半

即ち枯てのりあつたあのをきか

支考

木かすやきものりあつたあのをきか

智目

風や背中吹く牛乃あつたあのをきか

風竹

本枯れ川田のりあつたあのをきか

惟然

さかすやきものりあつたあのをきか

塵生

夷講

さひす梅酢賣み袴さあつたあのをきか

芭蕉

さかす梅酢賣み袴さあつたあのをきか

利合

鳥 附いませ

乃々の海まきして

塵埃よめぬ日ちりし浦

白空

追うけて雲よころか千もりの舟

葛葉

かありとんと庚申中し死あな形

お尋

入海や碇の釜に啼く千鳥

扇折

驚にほくくぬくし鴨乃豆

芭蕉

く山鴨を大追うくはくく水

乍木

おはよころひ入つよは海嵐うま

三人 利雪

ううしや海月よあらたあそひ

車角

えく透や子持ひあのうら氷

付氷

一塔よち山白魚や雪のふり

杉風

おくぬ山や脈まわして降霧

拙伝

杜夫魚を河豚の大ききそ水まほふ
越の川よのゝあらくまぢり

冬月 附いませ

雪のやう賣ありくまの月

里圃

あゝ猶のわけもは軒やみの月

夫孛

何より藤乃方まてやり紙をす海

巾春

ふ包や行きぬれを江の月夜

支考

埋火

埋火や雪ふるま客の歌布り

芭蕉

佛——さるゝあゝ志まき雪ふる火燈

^{少年} 桃先

自由や月を風かへま雪燈

同木

雪

如雪や行に橋あり夕アるる方

其角

新~~~~~や月をさるゝすき酒の味

全

雪あ~~~~~れ心のく~~~~~るな~~~~~てい

冬東

鶯鶯~~~~~のめ~~~~~と~~~~~る~~~~~た~~~~~れ雪

祐甫

雪垣やま~~~~~ぬ人~~~~~を~~~~~あ~~~~~の~~~~~て

葛平

ぬ~~~~~つ~~~~~の~~~~~も~~~~~の~~~~~鞋~~~~~を~~~~~あ~~~~~り~~~~~の~~~~~雪

支考

片雪や~~~~~を~~~~~傳~~~~~か~~~~~ら~~~~~す~~~~~と~~~~~く~~~~~俵

圃吟

三

思ふ心のまゝにや月枝のふゆ

文子

髪利を降しあふさうりけり

陽和

伊加え大おろさるるあや雪のた

配力

神樂

お糸糸に薫もあはれあはれ

史邦

伊加え

合居時やうりうり手の手の神お

路孝

行くめくた干鉢賣をすまたり

馬見

娘入のしりもさるる神お

許六

痕を送りうりうり神お

匠圃

煤掃 附 附 附

煤をきりや嵐込めさるる神

孫香

煤掃やあはれあはれさるる神

黄逸

おまゝな儀のかや煤をきり

馬見

燦々々々やうきふれてある神さ

筒如こ

煤掃也折あ一牧疏々々

唯然

餅つふや火をかきたり男を

仙水

餅はきやあうらうのとや籠の

鼠蒙

ゆら搗の手傳ひとあや山伏

馬佛

歳暮ら 附きまの衣配

くぬくた返も海きの市のさ

角江

内砂やあきてきまの洗ひ髪

里東

賣るやとくてもやんたのさ

草士

猿もあよのちりさやんたのさ

車未

大子や款子きとくは持るひ

万手

袴もぬ舞のちありとの骨

孝因

年の市街を呼んぬ穢との

具角

おろちん小豆も市の海をり

正秀

引張か一はかの考

狛子

桶の桶のちやあはしの

猿雛

天鵝毛のさしぬさめしてのさ

唯然

後世は草花も花もしてや

けらと圖司呂丸う海く居ありあり
のちらとて伊勢ももあつて侍り
いとのちのちのちのちのちのち

あて今もあつて

盗人のあつてあつてあつてあつて

芭蕉

余所もあつてあつてあつてあつて

支考

海に海所もあつてあつてあつて

土芳

高白のち弱りて海を蔽ふ

高白

高白のちのちのちのちのちのち

桃後

裁層を束の子らとてあつて

山崎

一志をてあつてあつてあつてあつて

利合

雑文

巾着風に糸帯を挽うらあつてあつて

軒履

括巾の何風を帯りてあつてあつて

土芳

このあつてあつてあつてあつてあつて

李下

仙杖
 圃仙
 雪堂
 二谷
 佐圃
 杉風

釈教之部 附 追善 哀儀

涅槃

涅槃像ありて其像も圓なる
 孫とん命也 離手合る瑞彩の
 山寺や猶守る所なるねをせ像
 貪福のあしと山寺なる涅槃像
 山鋒
 不撤
 芭蕉
 法圃

権佛

権仰やほろりあつたる井戸の

曲り

花も仰らぬて二と月

不玉

権仰や釈迦と程婆を徒舟に

之道

意多

冷おとくは水とて一課あり

嵐

馬場とくのかこしやうと課あり

去来

やは休や坊とてはなとてふと

法圃

甲戌のな大津の侍をさる

かゝのさるより消息をせられ

き四里よむして無念をよめ

定ぬるまはなほまきつて繁の真全

芭蕉

悼少年 二句

うらやまも麻木の葉もおとれ

惟然

その親をきりぬるの子を秋の風

支考

なほ

おぼえに待て

青のそをえ稲妻のこころその時

木花

さくらや 稲妻やと 漆桶の水

去来

法苑珠

柚も柿も おくろのれんり 法苑珠

法圃

臘八

鶺鴒ささくりにてんれを 物豆汁

許六

何のおれおのあまよりあまを呼侍

如行

雑是

洛東の真如堂に於て

善光寺 如来開帳の時

涼しくも 野山より 風を吹けり

去来

さきまの 山崎の 二丁さき けり

智月

けし 畑や 家まの ずりて ぬ在也

乙州

このふに 川越向ふや 富まよ

多賀

手まよ 朝の 音 涼 なるは

野坡

食堂に 雀 啼 たり 夕 時 ぬ

支考

旅之部

送別

え禄七手のまをききあひの

いのをん送りて

まぬくに群居のるん世のふく程

つのおや柿喰ひありしちのど

詩六九

木原海におまのり

旅人のちるるもの似や権のた

芭蕉

留別

倍の惟然り空あり

古婦のゆるは

嵐やもやまの草ひかり

木名

鮎の子にまじりて魚送るふのけ

芭蕉

甲斐の...の婦の泣き声

は...の...の...

手ありて牛にまじりて草花

木名

縮つは草は世をまじりて花

野人

あつとまじりて山嶺や旅のこ

野往

あまの園のあまのこ

あまのこ...の...

るにまじりて谷にまじりて花

あま

十圍のこの小はあまのこ

許六

大名の...の...の...

全

くはあまのこ

くはあまのこ...の...

魚名

はあまのこ...の...

猿雛

あまのこ...の...

我峯

おのころはまてふ海あり 引の馬

史邦

田園の心さししあしあし作りの
くみくみうりして

文王の廟あしけき秋涼

立人
呂丸

我備園つゝ九旅の境を起

佐圃

常陸の園ありあしあしうらふ所
ありまてせりあんとせり

そのおもとあしあしあしあし
あしあしあしあしあしあし

下にあしあし
あしあし

椽のあしあし情や梅に中是粥

支考

も川魚や道のさしあし松もと

全

え禄とあしあしあしあしあし
あり武らあしあしあしあし
の驛あしあしあしあし

あしあし

宵かりてあまやのあしあし

あしあし

續猿蓑を芭蕉翁乃一流乃す
何人の機をいふを志すは翁は此の
情伊賀と形を乃見松尾ふり
此子あり某一處らも伊賀を
漸く日本のもちてすをいふ
世も廣くあるをいふ一紙の書中
或いはけいあるはいふは
くははるはるのすなり

書中

111

THE EAST ASIATIC MUSEUM
COPENHAGEN
No. 100
1911

一、
乃書
たふ

之、
又

か

は



[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

